



TITLE:

ニホンザル野外観察施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

岩本, 光雄; 東, 滋; 渡辺, 邦夫

CITATION:

岩本, 光雄 ...[et al]. ニホンザル野外観察施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1987, 17: 28-30

ISSUE DATE:

1987-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163748>

RIGHT:

総説・報告

- 1) 江原昭善 (1986) : 現代社会とスポーツ。都道府県市町村社会体育全国大会。文部省体育局主催。
- 2) 江原昭善 (1986) : 「家畜化」概念はホミニゼーションにどこまで適用できるか。日本哺乳類学会シンポジウム。
- 3) 江原昭善 (1987) : 人類。文化人類学事典, 389-391. 弘文堂。
- 4) 江原昭善 (1987) : 霊長類・霊長類学。文化人類学事典, 831-833. 弘文堂。
- 5) 江原昭善 (1986) : 咀嚼システムとホミニゼーション。文部省特定研究「咀嚼システム」昭和61年度シンポジウム。
- 6) 江原昭善 (1986) : 揺れ動く人類起源論。アフリカ学会中部支部例会。
- 7) 江原昭善 (1987) : 人間性の起源と進化。日本放送出版協会。
- 8) 相見 満 (1987) : パンダに滅ぼされた人類の祖先。ウータン, 6(4):30-35.
- 9) 瀬戸口烈司 (1986) : 古生物学からみた分子時計の問題点。霊長類研究, 2:5-8.
- 10) 瀬戸口烈司 (1986) : 「歯の比較解剖学」(後藤仁敏, 大森司紀之編), 医歯薬出版, 東京, pp. 267 (共著)。

学会発表

- 1) 相見 満 (1986) : コノハザルの分布の展開——スマトラでの例。第2回日本霊長類学会大会。
- 2) 相見 満 (1986) : スマトラのコノハザルの分布の展開——毛色の変異を中心として。第40回日本人類学会日本民族学会連合大会。
- 3) 瀬戸口烈司 (1986) : 南米サル化石の地質年代。第2回日本霊長類学会大会。
- 4) 瀬戸口烈司 (1986) : 南米サルの中新世における適応放散。第40回日本人類学会日本民族学会連合大会。

ニホンザル野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・東 滋・渡辺邦夫

本施設の運営は上記3教官のほか、川村俊蔵・和田一雄・鈴木 晃によって進められた。昭和61年度の各ステーション関係の状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以来の畜積された資料をもとに野外観察施設の中では独自の位置を占めている。今年度は室山によるグルーミング関係の研究、宮藤による群れの統合度の研究(いずれも霊長研大学院生)などが行われた。この3年間ほどは春先から夏にかけて、砂が島との間に堆積し、地続きになる状態がつづいている。例年夏の台風によってその状態が解消されるが、観光客がこの期間どんどん島へ歩いて渡れるため、サル番を出して監視している。またマキグループの老ボスであるノスリは交尾期になると群れを追われ、昨年は主群から出ていったカニによって、今年は同じくゲバによって、完全に群れから追われてしまっている。今年度訪れた研究者は延 270 人日であり、その他大学、報道機関等の関係者は延 100 人日以上になる。59年3月の時点での島内の個体数はマキグループ13頭を含め100頭であり、この10年間ほとんど変動していない。〔今年度中の出産は15例中うち3頭が死亡した〕

2. 下北研究林

岡野美佐夫・東 英生(共同利用研究員)は3月下旬～4月初旬にM群を追跡し、オトナメス1頭にテレメーター発信器を装着した。まったく餌づけされていない野生群の麻酔捕獲としては最初の例である(M群は人づけされてはいる)。各月10日間7月まで追跡したが、追跡中に発信器がとれた。回路部品の初期不良によると思われる。1986年の岡野による新葉の採食からチシマザサのタケノコの採食にいたる土地利用を再確認し、チシマザサ採食のさいの遊動の特性が明らかになった。

12月にあしの会(森治代表)と共同で全域の分布と個体数の調査を行った。Z群は2つ、I群は3つのグループに分れていた。行動域も既知のよりさらに拡大していることが判明した。

3. 上信越研究林

横湯川流域の植生と Seed trap 法による果実生産量の調査(小見山章, 岐阜大), 志賀C群の

生態、行動調査(陸 斉ら、東京農工大)、志賀 A₂ 群の生態調査(長谷川寿一ら、東大)が、ひきつづき行われた。樹皮・冬芽の消化率実験(中山裕理、北大)が行われた。山本敦雄(志賀高原野外博物館)、和田一雄、鈴木 晃、陸 斉、常田英士(地獄谷野猿公苑)らは、横湯川下流域の山ノ内町で頻発する猿害問題について話し合い、横湯川流域のニホンザルの地域個体群の問題について検討した。

4. 木曽研究林

4月から9月までの間、ショウブ平観察場における S 群の観察が行われたが、5月まで安定していた約 110 匹の群れのうち 6月に 1位と 2位のリーダーオスが行方不明となり、7月から群れが非常に不安定になってほぼ同大の 2 個の群れに分裂した。その一群が 8 位リーダーにひきいられて餌場にきていたが、その 8 位も行方不明となって、9月には数頭の新オスがこの分裂群と行動を共にしていた。しかしオス間の順位はまだ固定しなかった。

猿害防除の方は、先手を打って脅しを加えたのがそれぞれに成功し A 群、K 群、S 群とその分裂群すべてはほとんど害を及ぼさず、ごく一部を除いて概して平穏な一年であった。こうして威しを適時に行うことの意味がこれまで以上に確められた。

5. 屋久島研究林

ヤクニホンザル自然群におけるオスとメスの繁殖戦略〔竹門直比(京大・大学院)、David. S. Sprague(京大・理)、塚原高広(東大・大学院)〕が共同利用研究として行われた。副産物として Ark の分裂の課程の追跡を行った。

好広眞一(龍谷大)、黒木一男(泰星高)、大竹 勝、山極寿一(JMC)、東らによって瀬切川中流域のヤクザルの生態学的研究を継続した。

屋久島全島での猿害;猿害対策として採用された生け捕り捕獲とヤクザルの地域個体群の保護をめぐる矛盾が深刻化した。過去 4 年間の補獲数は 1,500~1,800 頭(生息頭数推計 2,500~3,600 頭)。黒肥地一郎、萬田正治(鹿児島大・農)、川村、東、黒田末寿(京大・理)、東 英生(WMO)、泉山茂之(プレック研)、山際・大竹(JMC)らにより地元との協力のもとで適正で有効な被害防除対策の開発・検討・プランニングのための基礎調査が行われた。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡辺邦夫・山口直嗣・冠地富士男

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集し、定期的にはほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルなできごとや、通年の変化について分析をすすめている。

2) スラウェシマカクの社会生態学的研究

渡辺邦夫

研究所の特別事業費により 1983 年 8 月より一年間、インドネシアにおいてスラウェシマカク 7 種の比較生態学的研究を行った。今年度は特にそのうちの *Macaca hecki* について重点的な調査がなされた。

3) ニホンザルの社会生態学、とくに自然群の環境利用とグルーピング・社会構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会現象をとらえなおすために、屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行っている。

4) 下北西北域の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域の M, I, Z 各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。なぜそうなのか、また内部の構造はどうなっているのか、の二点に焦点を当てて資料を集めつつある。

5) 熱帯降雨林の霊長類の群集生態学

東 滋

同所的に生息する数種の霊長類について種間関係、個体群構造、資源利用などに関して比較社会生態学研究を行い、community 構造のなりたちを考える。

総説・報告

- 1) 東 滋:下北半島のサルー日本の野生動物その現状と保護一。江川正幸ほか「日本の動物」(共著)。
- 2) 川村俊蔵・東 滋・泉山茂之・黒田末寿(1987):ヤクザルの被害防除と野生生物管理一現状と問題点一、「環境科学」特別研究報告、屋久島生物圏保護区の動態と管理に関する研究(田川日出夫編)(1987. 8), 88~96。

- 3) 東 滋：サルと森と人—ひとつの生物的自然の歴史—，同上（再録）。79～87。
4) 足沢貞成：今冬の調査結果の概要。「さるとひば」（1986. 1. 10）

学会発表

東 滋（1986）：下北西北域のニホンザルの個体群の動きと森林の変化。日本哺乳動物学会第1回大会，横浜国大にて。

サル類保健飼育管理施設

松林清明（施設長・兼）・後藤俊二・鈴木樹理
松林伸子¹⁾

61年度は研究所における実験用サル類の飼育および研究使用に関して大きな転換が為された年であった。従来のサルの研究使用とくに実験中の拘束に対して，欧米から批判が寄せられたことに端を発し，サル類の取り扱いを見直す動きが具体化した。即ちサル委員会を中心に，米国N I Hのガイドライン（1985年改訂版）に基本的に準拠した「サル類の飼育管理および使用に関する指針」を研究所独自にまとめ，またこの指針で定めた規格に合わなくなった現有の飼育ケージを全面的に更新する為の予算化が図られた。上記指針は，サル類の飼育や使用に際して，動物に無用な苦痛を与えない事を主眼としたもので，場合によっては実験手技さえ制限する厳しいものであり，これがきちんと守られているかどうかを監視する委員会の設置も義務づけている。当研究所のこの措置は，国内の他の研究機構にも影響を与え，いくつかの学会・大学で，動物実験のあり方を規制または再検討する気運が高まっている。当施設は直接サル類を扱う部署として，この問題に対して今後も大きな責任をになってゆかねばならないだろう。

研究活動としては，松林（清）・後藤の2名が，マカクの種分化に関する海外学術調査の一環として，ミクロネシア・パラオ共和国のアンガウル島で，カニクイザルの捕獲調査を行った（11月～12月）。業務面では，飼育ザルの所内繁殖は年間に97頭，病気等による死亡は51頭という実績で，自家繁殖態勢・保健管理業務ともにほぼ平常状態に

安定してきたと云えよう。人事面では，事務補佐員であった伴野芳枝，飼育担当の春原則子両名が退職し，後任に非常勤職員として今井志江（事務担当），東俊之（飼育担当）の2名が採用された。

研究概要

1) サル類の繁殖に関する研究

松林清明

チンパンジー精液の凍結保存法について，引き続き検討を重ねた。また所内で生まれたマカクの第二次性比および1才性比を調べ，飼育下における性差を調べた。

2) 実験動物としてのサルの開発の研究

松林清明

パラオ共和国アンガウル島に約80年前に少数導入されたと云われるカニクイザルの遺伝的変異性を調べる為，現地で70頭を捕獲，サンプルを持ち帰った。現在分析を行っている。

3) マカク類の成長に伴う眼内視所見の推移

後藤俊二

各種マカク類を対象に，加齢による屈折率や眼底像の形態変化等について，単色光撮影法を応用し観察を行っている。

4) サル類寄生虫症の疫学的・臨床病理学的研究

後藤俊二

各地の野外生活ニホンザル群を対象に，消化管内寄生虫相の，生息環境による差異や季節変動等について調査を行っている。また，飼育下における伝播や腸炎発生と原虫相の関連等についての研究を進めている。

5) サル類の成長の生理学的および形態学的研究

鈴木樹理

各種サル類の成長を，血中各種ホルモン・酵素などの計測並びに生体計測によって解析した。カニクイザル・ニホンザル・アカゲザル・タイワンザル・ボンネットザルについて研究を進めている。

6) サル類疾病の病理学的研究

鈴木樹理

本研究所および野外で死亡したサル類について，主に，死亡率の高いと思われる出生直後から幼若齢までの死亡例を中心に，病理学的検索を行い，そのおもな原因および年齢による疾病傾向および各種疾病の病理形態の解明を行った。

¹⁾ 教務職員